２大ブランドの研究

エレキ・ギターのサウンドはアンプで作れっ！

Marshall編　第2回
JVM210Hでアンプの基本をマスター

Marshall

めでたく第2回目を迎えることができた本コーナー。今回は少しだけマニアックな話や使い方などを掘り下げていきます。「ギター・アンプ」という名の通り、エレキ・ギターの音をよりエレキ・ギターらしい音にするためのものがギター・アンプです。まずはアンプの機能を理解しましょう。前回は基本的／初歩的なことを述べましたが、今回は実践に向けた応用についても見てきます。

（文：鈴木健治）

チューブアンプならではの迫力

前号では、ギター・アンプには大きく分けて、真空管を使ったチューブ・アンプ、トランジスタ・アンプ、デジタル・アンプ、さらにDSPによるモデリング・アンプがあると説明しました。今回は少し掘り下げて話す意味でも、Marshall JVM210Hのように真空管を使ったチューブ・アンプに的を絞ります。

ギター・アンプの歴史的に言っても、Marshallと言えば、真空管を使ったチューブ・アンプが元祖になるのですが、現在、真空管を使った電気製品はほとんどありません。実際に使われているのはギター・アンプと高級オーディオくらいです。そのくらいある意味、マニアックな真空管をあえて使うのには理由があるのです。数十年前まで真空管は電気製品にとってはいたって普通に使われていたパーツでした。テレビやラジオにも普通に使われていたのです。そんな真空管ですが、「大きい」「熱をかなり持つ」「寿命も割と早い」などの不便な面もありました。そして、テクノロジーの進化や変化によって、小型で壊れにくいトランジスタが生まれ、さらに進化して、今では主流のいわゆるCPU（中央集積回路）などに取って代わられ、先述のように高級オーディオかギター・アンプくらいにしか使われなくなったのです。

そんな歴史のある真空管ですが、特にサウンド的にギター・アンプとは相性が合うのです。ものすごくストレートな言い方をしましたが、エンジニア的な説明は置いておいて、ギタリストにとって何ものにも代え難いチューブ・アンプの良さは確かにあるのです。もう感覚的な世界に入ってしまいそうですが、決してまやかしではありません（笑）。チューブ・アンプならではのサウンドの傾向があり、例えば、歪み方ひとつを取ってもエレキ・ギターとはとても相性が良いと言えます。そして、デジタル・アンプやエフェクターでシミュレートしているのも、実はほとんどがチューブ・アンプなのです。また、特にここ数年のテクノロジーやモデリング技術の進化で、本物のチューブ・アンプのサウンドにかなり近づいている事実もあります。チューブ・アンプもデジタル・アンプもシチュエーションによって得意不得意はあるので、好みやケースバイケースで選ぶのが今の主流と言えます。

多彩なサウンドが出せるJVM210H

1960年代にギター用チューブ・アンプが世に出てから数十年。いまだに第一線で活躍しているチューブ・アンプですが、最初の頃のMarshallと現行のMarshallとでは随分と違うところもあります。一番の違いはズバリ、多チャンネル化によるサウンドの多彩さでしょう。初期の頃のMarshallアンプのチャンネルは1つで、アンプを歪ませるにはアンプのボリュームをフルにする、という極めてストレートな方法しかありませんでした。

しかし、今ではチャンネルも増え、そこまでボリュームを上げなくてもアンプで歪ますことができます。Marshall JVM210Hもまさに多チャンネルのチューブ・アンプです。多彩なサウンドをアンプ1台で切り替えて出力することが可能です。また、専用のフットスイッチをつなげば、まるでエフェクターを変えるように、アンプのチャンネルを切り替えることもできます。チューブ・アンプもしっかりと進化しているのです。

マスターボリュームを上手に使おう

Marshallアンプの多チャンネル化によって、アンプで歪ませる場合でもマスターボリュームをフルアップしなくても済むようになりました。Marshall JVM210Hは2チャンネル仕様ですが、チャンネルごとにサウンドを変化させることができる「モード」が3つあり、合計で6種類のサウンドを出すことができます。OVERDRIVEチャンネルでGAIN（ゲイン）を上げればサウンドが歪むので、マスターボリュームは適量でOKです。これが「マスターボリュームをフルアップしないと出したいサウンドが出せない！」となると、例えば、学校の音楽室や部室、リハーサル・スタジオでは各自耳栓が必要になるでしょう。100ワットのチューブ・アンプをフルボリューム…。かなりの大音量です。話を戻して、GAIN（ゲイン）とBASS（ベース）、MIDDLE（ミドル）、TREBLE（トレブル）で音色が作れたら、マスターボリュームをフルアップする必要はありません。その場に合ったボリューム調整をしましょう。

マスターボリュームの目安

バンドにドラムがいる場合、ドラムの音量にアンプの音量を合わせます。これはベースやキーボードにも言えることですが、音量を決める1つの指針として覚えておきましょう。また、ボーカルは電気的に音量を調節することはできません。歌が聴こえないという事態を避けるには、バンド全体の音量を下げることが一番手っ取り早いと言えます。しかし、それができない場合はギター・アンプの向きをボーカリストに向けないようにするだけでも、かなり改善されるので、それも試してみましょう。特にMarshallはスピーカーの向きで聴こえ方が大きく変わるので、自分のギターの音が聴こえにくい時にも有効な手段です。

どんなギタリストがMarshallを使っているの？

極端に言うと、プロでMarshallのアンプを使ったことがないギタリストを探す方が困難でしょう。それくらいMarshallのアンプはアマチュア・ギタリストにとっては憧れであり、プロにはものすごくポピュラーなアンプなのです。

とはいえ、やはりMarshallのアンプにはロックが似合います。1968年のウッドストックロックフェスティバルにおいてのジミ・ヘンドリックスのパフォーマンスは、ギタリストなら一度は見ておくべきです。もちろんアンプはMarshallで、本物のロックなサウンドを聴くことができます。洗練された現代的なロックもそれはそれでアリですが、とにかくジミヘンのウッドストックでのパフォーマンスは必見です。ジミヘンはフェンダーのストラトキャスターをMarshallにプラグインしていますが、「ロックとは？」という問いのすべてにパーフェクトに答えてくれる最高の例と言えます。大事なことなので、もう一度言います。ジミ・ヘンドリックスのウッドストックでのパフォーマンスは必ず見てください。もしかしたら皆さんの世代にはわからないすごさがあるかもしれませんが、絶対に知っておくべきです（YouTube

▲マスターボリューム

▲モード切り替えスイッチ

各つまみの名称とコントロール

■Marshall JVM210H　価格：215,000円（税抜）

①POWER　電源スイッチ
②STANDBY　スタンバイスイッチ
③FOOT SWITCH/MIDI PROGRAM 各モードの切り替えをするスイッチ
④FX LOOP　エフェクトループのON/OFFを切り替えスイッチ
⑤⑥MASTER　最終的な音量を決める
⑦RESONANCE　超低音域の調整をする
⑧PRESENCE　超高音域の調整をする
⑨⑩REVERB　音の残響を調整する
⑪VOLUME　チャンネルごとの音量を決める
⑫BASS　低音域の音質を調整する
⑬MIDDLE　中音域の音質を調整する
⑭TREBLE　高音域の音質を調整する
⑮GAIN　歪みの量を調整する
⑯CLEAN/CRUNCH　クリーン、クランチのチャンネルを切り替えるスイッチ
⑰OVERDRIVE　オーバードライブチャンネルに切り替えるスイッチ
⑱INPUT　ギターからのシールドを挿す

でも見ることができます）。

ハードロック・バンドの元祖、レッド・ツェッペリンのジミー・ペイジはレス・ポールとMarshallという黄金コンビで主にプレイしていました。決してテクニカルではないのですが、そのサウンドにはハードロック～ヘヴィメタルの元祖と言えるエッセンスが散りばめられています。ロックなギター・リフの最高のお手本としても聴くことができます。一方、同時期に登場したディープ・パープルのリッチー・ブラックモアはストラトにMarshallというスタイルです。テクニカルなプレイの元祖であり、そのサウンドは一般的にストラトとは思えない太いものです。代表作はアルバム「紫の炎」です。これも聴いておきましょう。もちろん現在でもMarshallを使うギタリストは本当にたくさんいます。ロック・ギタリストの背後には大抵、Marshallのロゴが見えるものなのです。

「歪み」と言っても様々なサウンドがある

ギターの音を歪ませるのはとてもポピュラーなことですが、オーディオ（CD、iPod、高級コンポなど）の世界では御法度です。イヤホンから好きな曲が歪んで聴こえてきたら嫌ですよね。

ギター・アンプの歪みと言っても、いろいろな種類があります。Marshall JVM210Hなどの比較的新しいアンプの歪みはマスターボリュームに悩まされることがないので、単純に弾きやすいほか、ノイズも少なめです。歪みのキャラクターもきめ細かいと言えます。一方、古いMarshallではマスターボリュームを上げて歪ませるため、ハウリングが起きやすく、ノイズも増えてしまいがちです。ミュートをしっかりしないとノイズの嵐になってしまうので、ある意味では弾くのが難しいのですが、独特のアタック感や音圧は何ものにも代えがたい良さがあります。その中間的な歪みはある程度の音圧があり、弾きやすさも普通…といったところでしょう。ロック・ギターにおける歪みの世界はものすごく奥が深くて、大事なポイントなのです。

Marshallはクリーントーンにも味わいがある

ここまで、主に「歪み」について述べてきましたが、Marshallアンプとギターで作るクリーントーンも、フェンダー・アンプのそれとは違う独特の良さがあります。Marshallアンプをほんの少しだけ歪ませておいて、ギターのボリュームを少し絞るという常套テクニックがあるのですが、その組み合わせで作るクリーントーンは、カリンとした独特の味わい深いサウンドです。読者の皆さんもチャンスがあれば試してみてください。

ギターのボリュームも使ってみよう

アンプでの音作りはとても大切なことで、基本的な使い方やルールは守らなければなりません。一方、ギターにもボリュームやトーンなどのつまみがありますよね。いつでもフルで、つまみの位置は10にしていませんか。意味があって付いているつまみなので、いろいろといじってみましょう。例えば、少しだけボリュームを絞るだけでも、音量だけでなく、音質にも変化が起こります。アンプのマスターボリュームは音質を変えずに音量を調整できるコントロールですが、ギター本体のボリュームは音量だけでなく、同時に音質も変化させることができるのです。アンプとギターでバッチリなセッティングができれば、エフェクターを使わなくてもバッキングからソロまで、ギター本体のコントロールだけで済んでしまうこともあります。せっかくギターに付いているつまみなので、使ってみて、その変化を実感してみましょう。

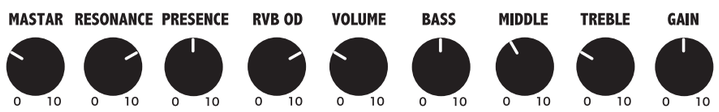
サンプルセッティング1　Rosanna/TOTO

当時、グラミー賞を総なめにしたTOTOの「TOTO IV～聖なる剣」より、スティーブ・ルカサーのレス・ポールでのプレイ。当時、日本のプロ・ギタリストでこれが弾けない人は少なかった…というくらいの名演です。

OVERDRIVEチャンネル　オレンジモード
MASTER：3、RESONANCE：7、PRESENCE：5、RVB OD：7、VOLUME：3、BASS：5、MIDDLE：4、TREBLE：3、GAIN：5

▲アルバム「TOTO IV～聖なる剣」

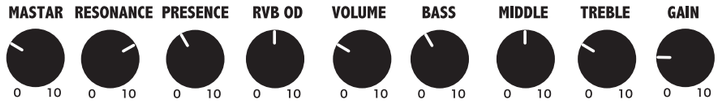
OVERDRIVE チャンネル　オレンジモード



サンプルセッティング2　Burn/DEEP PURPLE

名盤「紫の炎」より、リッチー・ブラックモアのストラトキャスターでの名演

OVERDRIVEチャンネル　オレンジモード
MASTER：3、RESONANCE：7、PRESENCE：4、RVB OD：5、VOLUME：3、BASS：4、MIDDLE：5、TREBLE：3、GAIN：2

▲アルバム「紫の炎」

OVERDRIVE チャンネル　オレンジモード